

発行 中山かんのん

恩林寺

中山中学下、電話三四一―一二四五



美濃加茂市加茂川町

薬王山大寧寺住職五島海南和尚を訪ねて

(恩林寺住職 古田正彦)

平成二十六年十月十八日、関市迫間、正溪寺を訪問した帰りに、美濃太田の大寧寺に住職、海南和尚を訪ねた。

庫裏には人の気配はないが書齋の窓は開けたままで日当たりのいい場所にはむしろにたくさんの銀杏が干してある。隣接する水屋のほうに回ってみると和尚が六十代と思われる女性と銀杏の果肉をとるために洗濯機を回しながら作業中であつた。

*和尚さん。こんにちは。高山の恩林寺です。

だいぶ耳が遠いらしく大きな声で声をかけると、

+おやまあ。久しぶりやねえ。よう来てくれやした。さあさあ、ちよつとやすんでいかなかね。

*今日は正溪寺さんまで来たもんで、ちよつとおつ様の顔が見たくなって、寄らせてもらいました。

+ほうかね。こんなところで、黄檗のボンさんに会えるなんて、ありがたいことですね。わしも、もう、ええとしやで、だーれもあいてにせん。

*和尚さんはうちのおやじと同参とか聞いてましたが、何年生まれですか？

+うん、儂は、あと三日で、満、九十八や

で。

もう、耳は聞こえんし、新聞も読めんようになった。お宅さん今日は運が えかった。今度はもう会えんかもしれん。毎日がこれで終わりじゃとおもつとるんやで。ちよつとまってよ。娘がお茶持ってくるんで。今日は二番目の娘が手伝つてくれるんで、銀杏を洗つていたとこや。

*しかし和尚さんお元気で何よりですな。いまもおひとり暮して見えるのですか？

+うん。わしの両親は本願寺の門徒さんで、そりやもう厳しい人やった。まいあさ、お仏飯を備えて、お経を読まされる。子供のうちに、阿弥陀経や正信偈はそらでおぼえてしまった。それから本願寺の寺の小僧に出て、十年暮したね。旧制中学出たらすぐにおやじは、お前は太寧寺へ行け。というので、大寧寺の小僧にしてもらつて、それから黄檗山の禅堂に入った。当時は厳しい修行が待つておつて、苦勞したねえ。

*和尚さんは品ヶ瀬全提さんと同参とか？

+エッエッ？どうして全提さんしつとるの？

*儂のおやじと同年代ということもありますが、全提さんの弟子という尼さんと、講習会で一緒になりました。

+ほうかね。全提さんには親切にしてもらつて、よう、面倒みてもらつたね。その尼さんというのがこの寺へ訪ねてきてくれたことがありましてな。あの尼さん、途中から全提さんの弟子になって、ついに全提さんのお寺をついでくれたとか聞いたが、人間わからんもんやね。わしもこのあばら寺に八十年住職やつて、檀家もないが草むしりばかりしているうちに同参も、知り合いいもみんな死んでしまつて、最後に残つて

しまつたもんやから、だーりもたずねてこ
ーへん。しかしな、こうなるのも、偶然で
な一て、自分の運命というか宿命なんでも
のは初めから決まつておつたんや。知らん
のは自分だけ。あ、ちよつと失礼、しつこ
がした一なつた。
すぐ目の前の柿の木めがけて ちよろちよ
ろ。

*和尚さん、しかし広い畑を管理してい
へんですね。

十ほうや。この畑は全部昔は寺の境内やつ
たが、くさむしりばかりするのがたいへん
やで、どうせなら畑の草むしつとつたほう
がええで、根気にやつとるんや。この頃は
あんまりほとけさんのおもりも充分でけん
よになつて、ほうや、今年はどうにか皆
さんに助けてもらつて施餓鬼を、わしが導
師で務めたが宝蔵寺さんとは無住やで、
やめてしまつたそうや。法蔵寺はわしの遠
縁やが、早う逝つてしまつたしなあ。もう
二十年になるかしらん。しかし、この年に
なるとお経も忘れてしまつて、よう、出て
こんでいかんわ。昔は習字の先生もしてみ
たけど、もう筆も持たん。字も書かん。
あ、恩林寺さん、銀杏好きだけ持つてい
きやー。この頃、銀杏の木がでこなつて、
身が小粒になつてしまつて、値打ちのうな
つていかんわなあ。

(五島海南和尚は大正五年辰年生まれ、黄
檨宗第十八教区の長老。恩林寺十二代正念
和尚とともに黄檗山、関義道老師について
修行、現在、数えの百歳、大寧寺の現役住
職。父、正念和尚の葬儀、兄、弘文和尚の
葬儀の導師を務めていただいた。)

以前は岐阜大学に勤務、伊深、正眼短期大

学に聴講して、漢詩を得意とする。美濃太
田 大寧寺に独居)

●黄檗山の鐘楼、鼓楼

黄檗山では朝、五時に開静(かいじょう)
夜九時に開枕(かいちん)と言つて大鐘と
太鼓をもつて時刻と消灯、大衆に起居、動
作の始終を知らせます。また、賓客来山の
時は鐘鼓交鳴して歓迎を表します。

人間は二つの耳を持つといわれています。

一つは日常生活において使っている感性の
耳であります。いろいろの物音を聞いてそ
れを知ったり、おたがいに話し合つて意志
の疎通をしたりしている耳であります。二
つは梵唄(ぼんぱい)、音楽等を聞く靈性の
耳であります。これは同じ耳で聞くので
すが、おごそかで美しい音によつて、日常の
それと違った幽玄の雰囲気に入らしめてく
れる耳であります。音楽は誰が聞いても美
しい音であるはずですが必ずしも誰でも心
に感ずるとは限りません。これにはやはり
音楽に理解を持つ、持たぬということがあ
ります。何かの機会にこれを理解するよう
になると、そのひとが知らなかつた一つの
世界が開かれます。この私のどこか深いと
ころに一つの靈的自己とでもいうものが潜
んでいて、それが微妙な響きの中に、ふと
その首をもたげ私の目をさましてくれます。
たとえば鐘の音は一つですがさまざま思
たたとえば鐘の音は一つですがさまざま思
いをその人にあたえてくれます。過去の集
合表象や心の底に結びついている無常感な
どが宗教の風光をひそかに伝えてくれます。
黄檗宗では読経の初めに香讚(こうさん、)
終わりには結讚(けつさん)、と言つて唐音
で節經(メロデーのあるお経)を唱えます。
微妙の響きは、ある時は無常、無我、静寂
を運び、聞くものを無量ならしめます。